



世界とつながる
教室

ブータンの民族衣装を着た大塚先生とブータンへの支援について考える生徒たち。グループディスカッションではさまざまな意見が飛び交う

高校、大学一貫教育を推進する中央大学杉並高等学校。教室での学びを通じて、世界とのつながりを感じてほしい。校内にまかれた数々の国際協力の種類が、少しずつ芽を出し始めている。

幸せを見つける 旅に出る



学園祭ではフェアトレードコーヒーを販売



英語の授業でもフェアトレードについて調べて紹介



「さあ、席に着いて。3時間目の授業を始めます！」
チャイムが鳴ると同時に、ガラッと教室の前の扉が開いた。
「あれ？」「どうしたの？」。生徒たちからざわめきが起こる。どうやら、いつもと様子が違うようだ。

教室からブータンに行ってみよう！

6月下旬の土曜日、中央大学杉並高等学校（以下、中大杉並）の教室に入った。きたのは、見慣れない布を身にまとった大塚圭先生だ。「今日のテーマはブータンなので、現地で買った民族衣装を着てきました。ちょっと恥ずかしいですけど」。教室中が笑いに包まれる。大塚先生が着ているのは、ブータン人男性の正装「ゴ」。今日の授業は何だろう。いつものスーツ姿ではない先生に、みんな興味津々の様子だ。

中大杉並では、毎週土曜日の午前中に選択制の「土曜講座」を行っている。総合的な学習の時間の一環で、英会話、TOEIC対策、キャリアデザインなど約20種類の講座を準備。自分の興味関心に応じて、好きなものを選ぶことができる。そして、大塚先生が昨年からはじめた講座が「高校生のための国際協力入門」だ。

教室から 世界に思いをはせる

「皆さんは今日、ブータンへのスタディーツアーに参加します。さあ、旅のスタートです」
黒板前のスクリーンに、現地で撮影された写真が次々と映し出される。緑豊かな自然、素朴な笑顔、世界一辛いといわれる地元料理…。殺風景だった教室が華やかになる。その説明を聞きながら、じっと見入る生徒たちの表情も印象的だ。

「さてここで質問です」。みんなの背筋がスッと伸びる。「訪問先の村に日本語の看板が立てられています。よく見ると、この村のために10ドル募金してください」と日本人の女性の名前で書かれ



フィリピンの子どもたちに送るため、校内で集めた靴を洗う生徒たち

ている。「あなただったら募金しますか？」。

これが今日のディスカッションのお題だ。4人1組のグループに分かれて、紙に意見をまとめていく。

「この日本人、誰だか分からないし、募金しない方がいいよ」

「でも日本語で書いてあるし、信頼できそうな気もしない？」

「10ドルがどのように使われるかを書いてくれれば…」

「そもそも、幸せの国、なのに、募金に必要なのかな？」

一人一人が思いをぶつけ合う。ブータンはもちろん、開発途上国と呼ばれる国

に行ったことのある生徒は一人もいない。それでも大塚先生の生の体験談を聞き、幸せの国だけではないブータンの姿が彼らには見えているようだった。「この質問に答えはありません。何をすることも、ちょっとしたこと疑問を感じ、考えてほしいと思います」とこの日の授業を締めくくった。「いろいろな国のことについてもっと知って、価値観を広げたいんです」と話すのは2年生の大久保沙紀さん。彼女は世界と日本のつながりを感じられるこの講座が大好きだという。

そしてもう一つ、新しい動きが。昨年、中大杉並には「国際ボランティア同好会」が立ち上がった。エコキャップ運動や文化祭でのフェアトレードコーヒーの販売など、部員たちが、高校生ができることに取り組んでいる。「僕たちには想像もできない生活を送っている人がたくさんいる。そのことを忘れずに、まずは身近でできることを探したい」と3年生の池田智之くん。彼の高校の卒業論文のテーマは「フェアトレード」。大学でもボランティアサークルに入りたいと頼もしい。

「みんなが海外に行けるわけではない。行く必要もないと思っています。授業を通じた気付きが人生のヒントになれば」と大塚先生。中大杉並にまかれた国際協力の種が、いづれあらゆる土地で新しい花を咲かせてくれることだろう。



国際協力のイベントではNGOのブースをお手伝い